



# 日中文化交流市民サークル「わんりい」 ニュースレター301号(2025年3月)

## 中国人の日本語作文コンクール

和田 宏

〈主催者は段躍中さん〉

中国人の大学生や高校生による日本語作文コンクールというのが、2005年から毎年行なわれている。主催は、池袋にある出版社『日本僑報社』で、後援には在中国日本国大使館などが名を連ねている。この出版社の代表が、1958年に中国の湖南省で生まれたジャーナリストの段躍中さん。段さんは、本国で「中国青年報」の記者・編集者などを経て、1991年に来日。1996年に『日本僑報社』を創立して、日本と中国に関する書籍を出版・販売する一方で、日中の友好・交流の様々な活動に尽力している。

エネルギッシュな段躍中さんが、20年前の2005年から始めたのが、「中国人の日本語作文コンクール」である。コンクールに参加するのは、大学や高校、専門学校などで日本語コースを専攻している中国人学生たちで、参加は学校数で中国全土の400校、応募者は、毎年3000名にのぼり、2024年までの20年間の累計で6万名を超えた。中国国内でも規模が最も大きく、知名度の高い日本語作文コンクールへと成長を遂げている。中国の若者たちが日本語で綴ったリアルな声であり、日本と中国の相互理解を促進する貴重な手段として両国の関心を集めている。この20年間、日中関係が悪化した時期や新型コロナウイルス感染拡大など困難にめげず、段さんは、夫婦二人三脚で草の根レベルの日中交流の輪を広げ、中断することなくコンクール開催に情熱を傾けて来た。段躍中さんご夫妻の努力に敬意を表したい。

〈審査員を務める〉

日本語作文コンクールの審査は、三次に亘って行われる。凡そ3000本の作文について、第一次審査で言語学などを担当している日本の大学教授ら15人がチェックし、第二次審査では、一次審査で絞られた上位20本ほどの作文に、二次審査員10人が目を通し、内容と文法の2つの項目について各50点満点で成績を付ける。二次審査員は朝日新聞Globe編集長や大学教授など10人が務めており、「わんりい」会員で、元NHK記者・神奈川県日中友好協会会員の私も僭越ながらその一人である。私は、15年程前、池袋駅西口へ出たところ、道路上で手にした中国関係の本を宣伝



コンクール受賞作品が掲載されている号

していた段躍中さんと出会う機会があったのが縁で、2012年の第8回目コンクールから二次審査員を務めるようになった。第三次審査は、段躍中さんらがスマートフォンなどを使って会話を交わし、学生と生の音声審査を行う。こうした3度に亘る厳正な審査を経て始めて、最終的な成績結果が決まるのである。

〈ご褒美は日本訪問旅行〉

日本語作文コンクールで、最優秀賞(在中日本大使賞)と一等賞を受賞した中国人学生には、副賞の褒美として1週間の日本訪問旅行がプレゼントされる。2024年は作文のテーマが、「AI時代の日中交流」だったが、最優秀賞を受賞した大連外国語大学の林芳菲さんを始め、一等賞を取った天津外国語大学の林婧さんら、男女計6人の学生たちが2025年2月17日に来日した。埼玉県和光市の居酒屋で歓迎食事が行われ、私も作文コンクールの二次審査員として招待された。歓迎会では、美味しい日本料理のフルコースをいただいた。中国人の大学生が立派な日本語で挨拶し、中には、将来アナウンサーになって国際的に働きたいという希望を持っている女子学生もいた。

ここで、一等賞を取った天津外国語大学の林婧さ

んの作品の一部を紹介する。

紅葉の美しさを歌った在原業平の短歌を例にして、百人一首の和歌の楽しみやカルタ取りを教えてくれた先輩への思いを情緒豊かに綴り、身の周りの美しい日本語の物語を掘り下げたいと、述べている。短歌が趣味の私は、高得点を付けた。

—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—

『ちはやぶる』

先輩に学び、日本語学習を頑張る

林婧

空港では、耳元に人の声が、遠くには飛行機の離陸する轟音が響いていました。飛行機が遠ざかってゆく空を眺めていると、自然とあの紅葉舞い落ちる国と、瞳の中が紅葉のような情熱に満ちた先輩が浮かんできました。劉先輩は、とうとう日本へ留学に旅立ちました。私は空に向かい頭を下げて、手にしていたハガキを見ました。別れる時に先輩がくれた紅葉のハガキです。裏面に「ちはやぶる かみよもきかず たつたがは かくれぬなみに みづくるとは」と書いてありました。先輩が大好きな和歌です。和歌を見ると、去年の夏に引き戻されました。

(中略)

『小倉百人一首』のびっしりと書かれた文字は、山林の中に幾重にも重なった紅葉かのようにです。彼女にとって、これはただのカードではなく、カードの歌、文字、それらすべてが日本語の魅力を語っているのではないのでしょうか。彼女の日本語に対する丁寧さや情熱も紅葉のような物でしょう。私も彼女に影響されて、いつも何も知らない子供のような好奇心を持ち、日本語の世界を探索しています。身の回りの美しい日本語の物語を掘り下げていきたいです。これから、ステレオタイプではなく新たな視点で見ようと決めました。劉先輩は彼女の物語に向かって憧れの国に旅立ちました。いつか、また彼女とカルタをしたいです。いつか、私も、この先輩からもらった憧れをもって、自分の「紅葉」と日本に再会したいと思います。完

—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—+—

以上、日本語の素晴らしいこと!! これだけの名文を中国人の若い大学生が書くとは! 日本人でもなかなか書けるものではない。

〈西池袋公園で中国語のお喋り会〉



左から 段躍中さん 林婧さん 筆者

段躍中さんは、2007年8月から、毎週日曜の午後2時から5時までJR池袋駅のすぐ近くにある豊島区立西池袋公園で、誰でも参加出来る、中国語と日本語で勝手気ままにお喋りする“星期日漢語角(日曜中国語のまちかど)”と言う市民対話のイベントも主催している。これまでに延べ3万人が参加している。

“誰でも・何時からでも・無料で参加できる・日中交流の場”がコンセプトだ。“わんりい”の読者の皆さんも、たまには池袋まで出掛けて行って、上手でなくても良いから中国語で若者たちとおしゃべりして来てみてはいかがでしょうか?

ところで、“わんりい”会員の須崎孝子さんから突然、電話が掛かって来た。私が2025年1月号に、田部井淳子さんと会ったことなどについて書いたのを読まれたからだ。須崎さんは、女性として世界で二番目にエベレストに登頂し、中国人としては最初に珠穆朗玛峰に登頂したチベット族の潘多さんと親友であり、両登山家の対面実現に尽力された。潘多さんの自伝『潘多伝』も邦訳されている。

須崎さんは、貴州大学で長く日本語を教えることを褒められたら来て、この『中国人の日本語作文コンクール』の優秀指導教師賞を2022年に受賞している。私との不思議な繋がりを知って、“哎哟ー!”と驚いた次第だ。(完)



“日曜中国語のまちかど”の参加者